



感動を届けられる走りを見せたい

東海大学 陸上競技部 長距離ブロック 川端 千都さん(3年)

長距離走で高校時代から全国大会にも出場、現在は東海大(神奈川県)で日本インカレやユニバーシアード、箱根駅伝や出雲駅伝などさまざまなレースに出場し、1500mからハーフマラソンまでさまざまな種目を走る川端千都さん。今まで駆け抜けてきた選手生活、そしてこれから走っていく将来への展望を伺いました。

思い作りから始まった選手生活

ランナーとしての道を歩み出したのは中学3年生の頃。若浦中にいた頃は硬式野球のチームでの活動がメインで、足は速かったが野球の練習の一環としてしか走ったことはなかった。野球を引退後、みんなで駅伝大会に出ようという話になり、初めて競技としてレースに出場。1区で区間3位の快走を見せたことから綾部高校にスカウトされ、本格的に長距離ランナーとしての活動を始めた。

高校2年の時、インターハイの3000m障害で全国2位、京都府代表として都道府県対抗駅伝にも出場。高校3年では、インターハイの5000mで8位、国民体育大会3位、都道府県対抗駅伝では1区を走り3位でタスキをつないだ。長距離ランナーとして大きく飛躍。自身初の国際大会であるアジアクロスカンントリーの出場を果たした。その後は東海大学へ進学し、体育学部で栄養学やメンタルトレーニングなど科学の面からスポーツを勉強しながら日々ランナーとしてトレーニングを続けている。

レースは過酷な心理戦

レース中はどうなことを考えながら走っているのかとの質問には「自分の順位や速度残りの距離を意識しながら走っています。状況を見てペース管理をしないとダメです。一方で『最後は気持ち』。時には無理をしても集団に食らいついたり、スパートをかける必要もあつて、単純な足の速さだけでなく、判断や駆け引きが勝敗を分かります」と頭脳戦としての一面もあることを教えてくれた。

競技生活の中で、一番苦しかった出来事を聞くと、「2回生の頃、髄膜炎で入院した時、退院後も思うように練習ができず、箱根駅伝でも苦戦。その後も記録が出ない停滞期があつた」と振り返った。いつ脱け出せるかわからない停滞期を支えてくれたのは地元の友達やチームメイトだった。テレビ中継や試合結果が出れば直ぐ連絡がきた。そんな仲間の支えがあつたからこそ、苦しい時期も地道にコツコツと練習を重ね、今年の箱根駅伝でレース終盤の9区を5位で走り切り、確かな手ごたえを感じたという。

思いを乗せて最後の箱根へ

座右の銘は「走姿顕心」。思いは走る姿にあらわれるという意味だ。陸上選手にとつて、支えてくれた友達やチームメイト、恩師や家族への感謝や恩返しは、走る姿で伝えるもの。見てくれている人に感動を届けられる走りを見せたい。「4回生になる来年在最後の箱根駅伝。3連覇中の青山学院大を破り、優勝してみせるので市民の皆さんはぜひ東海大学を応援してください!」と力強く意気込みを語った。

大学卒業後の進路を訪ねると、実業団選手として世界中のレースで戦いたい。3年後に控える東京五輪は絶対のタイミングだと今後の展望を聞かせてくれた。その後のことは?と少々気が早い質問には「大学で学んだ知識や経験を生かした選手の育成や指導ができれば」と答えてくれた。これからの選手生活、そして指導者の夢。まだまだ人生という長いレースは始まったばかりだ。



まいつる

花図鑑



vol. 126

タチツボスミレ
(スミレ科)

見ごろ 3~5月頃

各地の山地や山への日当たりの良い斜面などに生える多年草で、早春から咲き始め、スミレの中では最も多く見られる。スミレの仲間には地上に茎のあるものもないものがあるが、本種は茎があり、枝が分かれして株となる。葉は心形で縁に鋸歯がある。春茎の下部から花柄を出し、先端に淡紫色の花が横向きに咲く。夏には閉鎖花(※)を出し種子を付ける。名前の由来は、立つて咲くツボスミレでツボは「庭」、スミレは大工道具の「墨入れ」からとも言われている(諸説あり)。

【協力】瓜生勝朗

市文化財保護委員(植物分野)

※閉鎖花…花を開かず自花受粉し結実することで種子を作る花

